

倭訓栞中編

不部

二十二

和書門			
二	一	六	五
一	八	〇	一
冊	架	函	號

庫文閣内		和
三	二	和
三	一	書
函	八	
四	二	
架	冊	類

内閣文庫	
番號	和 21651
冊數	82 (56)
函號	263 10



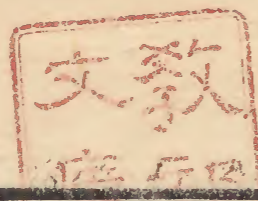
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Gray Scale



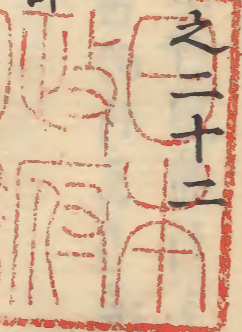
© Kodak, 2007 TM: Kodak





倭訓栞中編卷之二十二

本の部



洞津 谷川士清纂

ふい／＼

田子ふい／＼の即きりま／＼の地あり

ふい／＼

國語、風聽廬言、於市と／＼／＼注、風ハ采

△ふい／＼

副使は／＼朝鮮正使の佐也○禪家／＼

ハ副司あり

ふい／＼

風鑑と／＼文徳天皇の時山田春興此術／＼得

ふい／＼

／＼事元亨釈書／＼由皇宋類苑／＼風鑑一事乃昔賢

ふい／＼

識人物、拔擢賢才之所急、非市中ト相／＼教用以賈藥

ふい／＼

取貨者／＼／＼

ふい／＼

風鳥あり／＼／＼の下ふ／＼

ふい／＼

風鈴あり風箏も同／＼○風／＼／＼／＼の形也

倭訓栞

中編卷之二十二

不

て名く藤紫とて蔓あり

ふうらん 風蘭一名桂葉此物催生と妙之臨産し房中

し掛アとてり中山傳信録し懸桂風前とてり

○若く紅白ありて肥前は大葉の品ありとてり

ふうろう 風露草とてり花梅の如く紫色あり○郡

内風露あり色紺あり

ふうとう 風藤葛の義南藤一名風菰ある者あり

古より名は傳へる事ありて伊豆の国より

出ずハ葉圓し一程の品あり葉細長し絡石し似たり此は

野より出つ

△ふえき 無射はより律歷志し亡射し他り射ハ厭と

そり

ふえとけ 笛の竹あり通雅し有雅笛有羌笛注雅羌共

以美竹作俗呼曰笛竹とてり

ふえの孫よむつらひえ 笛し落梅の曲あり

△ふうく 不覺とてり東鑑しとてり

ふぐみ 符合の字あり俗しより符合せりとてり義

あり

ふぐ 舞樂あり徒然草し何事と偏エりや

たぐれと天王寺の舞樂のまやと愧す太子の時

時の國今も傳はるるをせとす

ふりけ 踏掛とてり今舞人のすねあてり金欄と用

うとそり

ぶぐん 歩艱しより歩行艱難なつらたると

日本紀し渥田はよりふけとてり

ふうつ 新撰字鏡和名抄し石龍苳はより又たつ

ひげもるる今たぐり野必大ハ三葉芥とせり

ふうぐつ 和名抄し深頭履はより其頭短者謂之半

韓ととり

ふりくち 深草里ハ山城紀伊郡あり土盆名きり
伊勢物語詞とりてより今も源きあとり
我ハ葛野郡屬す又源里と名つくありこいと
陶野とりの類聚国史より白清涼寺の東南今ハ軒
とり野ありと土盆造る証業とん

ふりくち

和名抄牡丹はより周茂叔の説牡丹
花之富貴者也とりのみ及きあれた富貴は義あり
づ一説牡丹の名よりてふうととりとみ来アと
ふと横音通せり牡丹ハ赤き花と主すととり
○肖柏の発句よまきさる花やとりのふととりとより牡丹
花と味あせりと牡丹ハ和名ハ夏の季とすれと連
かりけ夏の京物とすまれまより夏つけく咲とのあり
△ふきや 水滸傳吹筒ととり

ふきん

布巾の音ありととり拭緞の義ありア又鉢
盃巾はふきんとりの柄せりや

ふき

風煙雨雪より吹まると吹頻の二義あり

ふきもの

吹玉より鼓吹ありととり

ふきたが

寛正官符五色吹玉とるえ新猿樂記
唐物の肉入り今と硝子の品あり○俗に麦門冬の
実ハ吹玉とりの管とて吹あはる小兒の玩とするあり

ふきせき

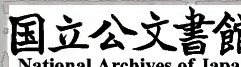
武器石之肥後菊地の城趾出甲曹劔槍の
各その形ありととり

ふきり

馬の鼻の總名又鼻竅はよりととり
枕草紙よりととりととりととりととりととり

ふき

神代紀吹捲ととり
吹巻風也今と吹まるととり



つり木葉は吹舟をくわひあつて万葉集にも飄るも巻
渡りしと見えたり

△ふぐ

和名抄に鯨鮪はよく常の河豚はよくふく
きたる魚なり古にふくべし西國四國にてふく
その蝦夷にふつふと皮よてふと虫はなり其形蝶
似て強しある人魚紙にんきけり二三十枚は通し
たる物語あり凡そ魚品と目と物守の河豚の毒魚たる
初めし中に入るとそのおれは入りまふはを
○近ごろ世人食う嗜む者多し西土にも同しきや
梅聖俞の詩に春洲生荻牙春岸正楊花河豚當此
時貴不數魚鮪と見えたり荻牙は毒を解すといふ上
野砥の粉とよし又抱子に食うて助會せるとのあり此
物に就く一國候古今の卓識あり藻選に載て詳あり
○まづりふぐは食物本草にも細魚とす又ふぐ

△ふぐ

あり異品あり又入りふぐとらふぐとも針あ
り背に虎班あるは虎ふくと至小のおはまつとふぐ
ともまふさいふぐとも又川ふぐあり○和名抄武藏の
名に鮎浦はふぐとす鮎の字誤り

△ふく

佛供あり其器銅なり造る登之とす豆は
木質にて造る蔓豆は竹にて造る皆漢器とす仏具は
らす

△ふくけ

服紀は神宮に服け道とすハ服紀の葦及
僧尼山卧法体の者ハ本道は避く小徑は通ふといふ○
神祇式に重服奪情後公に葦不得参入内裡とす由類
書纂要に奪情ハ脱服ありとあり

△ふくら

類聚雜要に巾布久良弘一寸三分上下細とす
えりり今も同し
万葉集にも由俗にふくせともかぐともいふ

堀串の義とより野菜はらり用う又機のためはらり
 とて地より我はもより○和名抄に鏡はらふふぐりと
 訓せり多く竹を造らばとてあり○はらは字敷抄に
 括字はよりれと字書よりその義あり埃囊抄に漢土に
 ハ土垢子和一はつふふせとよりとるよりついで衝の義和
 名抄に土具ありとより
 ふぐつ 太平記に踏組とよりふくたりの香とよりや
 俗に醜人に罵辞とより
 ふぐり 和名抄に陰囊はらり囊粟の義ありアとい
 たり畢丸のあり栗は囊に入たるめ抄に右素經の莖垂
 ぬ釈して莖者玉莖垂者陰囊とより
 ふくす 讀書より復字之天子へ素讀はなるは侍讀
 とより推うとよりさへなるは尚復とより
 ふくろご 囊兒の義薄膜ありて兒は色とて生るは云

世に孕婦の袋は縁ふと忌事よりふま此は為あり狗猫の兒
 狐生と亦然り
 ふくたへ 多治拾遺に衣服の名より服体の義今衣
 とよりみきとや
 ふぐらま 文車とより昔文席より引かして書籍の用は
 弁とより徒然草より多くて是若しつらぬハ文車のちり
 塚の塵とより
 ふくひき 埃囊抄に年始に二人むらひて餅は引破ると
 福引とよ内裡の餅の名は福生菓とよとより今よ福
 引ハ天平二年正月に短籍は搦とよとよその字は福ひ
 物は始ふは始り
 ふくより 後日として重日と同じとより東鑑にハ復日と
 えて吉日とせよ重復日とよも
 ふくやく 新撰字鏡に詭とより又謬はより

ふくより 全浙兵製録に瀨風子訳せり今も物に
とらう反語せらるる一又ありと稱ふ

ふくぶん 水滸傳福分と云ふあり東鑑に八
ふくせん 覆面と云う字事物紀原に云ふ○死者は

面幕と云う 覆藏と云う俗にふくざうありと云う

ふくざう 類聚雜要に伏輪と云ふ常し覆輪とかけ
り金覆輪と云ふ後漢書注に鈎音口以金銀縁

器也と云ふ 鄙語あり唐の王元宝の故事に富富の訛
ふくはん ことらう天室送るるし出たり

ふくやう 福山と云う備中也城ハ太平記に云ふ
ふくろん 武官あり兵仗は帯一禁裡内外の守護武道

ふくろん 一より一官は云ふ

ふくたえ 小きあゝの塩藏にたるは即鰻也と云う

又とこがとらう常陸の義と云ふ○あゝはふくろ煮とい
ふは脹の義也と云う○紀の終野に千里貝と云ふあり尻

一曲有る孔あり鰻の奥の孔あり
ふくまひ 鰻耕録に謂有疾曰不快と云う

ふくろろ 和名抄に集はらう鴉も鵬も同一説文に
不孝鳥也と云ふろふろあり形のふくれあるより名と云う

ふくろろ 新撰字鏡に鴉鴉より常陸に云ふ鳥と云ふ
嵐はとら取はとら上総に云ふと云う呼伊勢白子と云う鳥追と

ふくろろ 蝦夷と云ふまこへきと云う拾玉集に
ふくろろ 中くまとありと云う小夜更と云うのふくろろの云

○寫集あり毛羽黄赤なり又白集あり蝦夷松前より出
狐と云う狐と云う獵師鳥と云ふも集の小なうあり鳴る

異まり奉白集にのりすりおけと云う衣の料と云う

ふくはけー 源氏ふくつけつとともさう遊仙窟へ貪

生はふくつけびとよらり

ふぐらうせ 太秦牛祭文へ間風とちり寸白の事ありとい

つり間へ新猿樂記へふくはれと字書へ取見あり倭字か

まー

ふぐらうはき 和名抄へ響はより馬腹下聲也といふ

ふくまうー 大坂堺へ神棚へ伎へさ雑煮或ハ餅の初穂

ふとひを集め糝の内へ入是はさうー京於へハ雑炊へ餅と

入まらふよ○江戸へハ正月三日上野護国院へ福もじ

あり大黒の湯と移る

ふくぐー 和名抄へ肺と訓せり気はまら藏ありむ

吹の義ありへ一新撰字鏡へ胸又膜又肺又腓はより

ふくびやう 黄胖病はよ其志ふくはくはるるとのこ

尾張へちとよ○腹痛の義とあり○天徳中へ人民

頭腫は世へ福来病とさう

ふくらまふ 有職問答へふくはるはり標也へふと冬昔の

一種ありへ一或ハ枯地志へよ羊櫛へとさう内宮へてふく

らそとよ神路山へまー○葉はとて綿糸は深へ一扱

はたぐーふらうんぎとよ泡あり

ふくらなふ 袋棚あり行幸御幸の時紙多目へかとい

袋へ入へ持たさひ納め並の棚へとさう一説へハ茶人紹鴎

始へ造るとさうとて紹鴎棚へ名くらあり

我名とハ大黒庵とよふれと袋棚へハ秘事なごめらる

鷗四條室町へ住た蛭子社へ右隣へはめく大黒菴と名く

とそ鷗ハ武野氏武田信光の末あり茶道は珠光へ受

け千宗易へ傳へ又和方の傳へ道遥院へ得く時へ名

はゆよりとさう 史記秦王政囊撲二弟へとるえより

ふくまふま

福寿草の義元旦に花咲かるとく元旦草
とも名く歳菊としつう八重福寿草あり浅黄福寿草

り

ふくろのふくれくろ

神代紀に囊中玄櫛と云ふ
西土の書に囊底智と云ふ櫛の字法苑珠林に

ふくまふま

△ふけつ

徒然草に唯継中納言ハ風月の才に富る人ありと

ふけり

俗に魔のふけり
物にまをるハ皆不孝の音あり○口語にふハ

ふけり

不與の義あり
櫻の品につう富家殿とあり鳥羽院の松政藤忠

ふげん

實の字治の別業に
普賢菩薩の乗取の白象の鼻に似たり

とよ老ハ鼻と訓同しとの白く且大あり比するなり一説

し普賢堂あり鎌倉の普賢堂に此様ありより起る

とよ

ふけき

越後柏崎に出たり同居のようともひき

ふけひ

新勅撰にふけひの浦に田鶴を鳴るなりと

あらハ紀伊あり新拾遺に大なる名をふけひの浦あり

とよ老ハ和泉あり後古今に橋立やよらのふけひのさ

ふけり

よ千尋とよみハ丹後あり多く吹飯とあり

△ふこつ

康富記に聊無骨歎と云ふ俗に思ひや

ふこつ

若四体之無骨と云ふ盛衰記にちみハ孫ありとあり

ともりしり天骨をさびみたり

△ふさぐ 神代紀し塞はよりふさぐの語又核とより
り塞音く邊塞の時ハさへ○日記しふさぐは所塞と
しりつら及びあり又阮とふさがるとより阻あり險あり乃
付ハあはれる

ふさぐ 無雙の音ありとろ

ふさぐ 俗にたらりしとろとろ万葉集し繁き事

ふさぐ 俗にたらりしとろとろ

ふさぐ 無作法しり世事使用し儂儂に訣せり無作

法者

ふさぐ 和名抄し蜀椒に訓せり

△ふさぐ 修理公普請とよハ梵書より出たり今も王家

の職名しハ修理とよハ武家しハ普請とろ請と志んと

よむハ唐音をたし助力をめてゆるしとろ作事と
ろそろ之れ○不審の義もあり不審の者ありとろ

ふさぐ 後世所信為符所唱為咒方術家謂之越方又
号禁架其符謂之丹書所以使令鬼神厭殺人物也百檄
鬼神之書謂之符籙攘封崇除疾病或用符水而飲之亦
多矣

ふさぐ 溝中し生るる小葉節に返る四葉づ生し九月
比し梢し紫花あり

ふさぐ 柴原あり狹名のふさぐ系をとりて麩子系と
よみ説く○大和しふさぐ原村あり楳とより

ふさぐ ちりたつ ちりたつ小苗しよりいま節たぐぬまはとろ
ちりあり○口語しよみ木節し譬あり也又節持立と云
る

ふさぐ 滾毬也しとろ若葉含みし○草花し

ハツんハ此れ剪髪羅也と云り 振節紫節 按節管の志
を云り

ふしとの 賦物と書り連款発句の中の奥に字と
つゞく別の物に轉して名目とする

ふし志を 紫はふしとも志をとも云りよと合せし
○ふし志をの加賀と云り待賢門院の女房あり千載

集し

此より名はゆりとし
此より名はゆりとし

ふ志やう 不従の義あり不祥の義あり不正の義あり○
府生ハ令條はちて後し並れし

ふ志やう 無性の義としり懶惰の志あり

ふしまろぶ 童蒙頌句し蹉跎としり

ふしやふき 伏たす柳はしり

ふしふたの 鐘しり拮繩目としり拮音櫛也繩目の色

草紙して威したることしり

ふしんを 節奏しり墨譜し

ふしかうみ 伏拜の義教拜の意あり鄙俗し遙拜の

事しりなるハ特詠しり○伊勢飯高郡し伏拜しと称

する田地及松あり祭主下向の対し上館の社はねしり

ふまゆん 僧家しり朝野群哉し関自家五十御

賀諷誦文としり

ふしつげ 歌曲し入調するし

△ふす 貝原氏の説し蝦夷の人ハ附子ハ矢志しり塗て

獸と射る是はふすし是草烏頭と煎したり射岡ふ

るべししりしりしりハ附子の音便あり世の人好まぬ

しりしりしりしり是ありしり賊盜律以毒藥美しりの内

しりしり射岡ハ本ましりしり○享保中蝦夷産川

鳥頭はゆり川鳥頭ハ附子の母とゆり○若狹よい
とてくはふすくゆ

ふすぶ 和名抄ハ贅はゆり○懸疣はまがりふまへと
ゆり

ふすまよ 万葉集よも由今よふゆりよて多きはよふ
はを地よ河あつー

ふすべいろ 艶字はゆり物被薰也とゆり○延喜式ハ薰
草えくゆり

ふすま申た 道成集よ女院の所前よて言のひろゆり
てゆりー

年とよ冬降ると知あつとこゆりきふす戸君式
源氏ハ海のおとてハゆふはるりたるんやういゆりみりて
神ありゆりゆくとるえゆり明月記ハ兩脚融地雷光張倉
とよ是あり

△ふせい 不情ハく無精あつー

ふせい 俗ハ物のふせいもあつとゆい彼ホふせいふとも
ゆり公事根原ハ鏡刀櫛ふとふせいハ具足ありと見え

ふせいハ 東坡ハ詩ハ消磨未尽只風情と見えゆり
為兼集ハゆ伏庵の義茅屋はゆりや祢ハ

地ハおふせと掃ハてとさハるをすくはくまてつゆり
はよ来ハたはゆりのまろやれ類をり

ふせがは 流人の伏望とゆ諺あり伊周公流人の内ハ望
はよせ身はちりて所母公は問答ハゆり孝子傳ハえ

ふせが祢 鏢ありとゆり伏金の義あり
ふせぎぬ 鷹鳥ハゆ僵衣とゆり

ふせんご 名目抄ハ卧蝶とる冬直衣及同下重文と
ゆり蠶蛾とる蠶の卵は紙よあつとつゆり臥とゆり据

一や三條裝束抄一浮線蝶之丸遠文とも云浮線綾とは
別ありとて浮線綾ハ為浮文熟線綾一と云す胡曹抄桃
花葉葉皆浮線綾一也○三河の地名一外蝶あり
ふせんアト云

こくそ

△ふた

豕公ハ猪も同しう肥くぐくまらるるもの

之綴ハとて疑ハり云あり○猪脂とまんでいふとて又虫語之

○山がく河り山猪の牙をこころの○聖武紀一和買幾内

百姓畜猪四十頭放於野令遂性命とありもがくなり

ふたん

布單の音あり内裡式一又由縁道一まらるる單

布也建武年中行事一布縵一似る布の縵代りとも

ふたぐ

和泉あり和泉郡一二田あり二田物部舊事

記一と云

ふたい

舞臺と内裡式一うけり西土の馬櫛是あり

ふたり

二人ハよむとつたれ

ふたん

俗一平生ハ不断と云いたえ一を此意味未了

梵書の不常不断よりありとて常川公記するハ常一たえす

と云義之○勢州奄藝郡白子の名木一不常揺あり四時

巻たえ守よと名くとの地りく木太刀神祠あり今鳥居

此故趾存せり木太刀の名朝熊七社の櫻大刀神の名一近

一橋宮ハ木花開耶姫ハ多ありて開耶姫ハ易産の神あり

今佛寺とありて其像と子安観音と縁一とて易産ハ祈ふ

ハ木大刀の社の送ある一とて手鑑一まの頃白子と云

まらるるて彼所の不断揺と云い多許とてとてふらり

伊賀國伊賀郡うぢや村一雷の社あり式一と田守社是也

風土記一木華開耶姫ハ多ありと云い無揺のるが云り今

地名一と云らるる一と云ありもお似たり○不断梅あり常ふ

花実ハ係也なり

ふだらく

新古今集よりハ觀世音菩薩ハとして
 之り西域記ハ布咀洛迦山と云々ハ花嚴經ハ所説
 の補陀落として別あり今ハ補陀落山ハ毘陵唐氏説
 ハ觀音現身独補陀為著而其徒往ハ必跨海以求焉
 之り唐の浙江省の寧波府ハ属ハ梅岑山と号す齋
 衡年中ハ日本僧惠等の開きたる地ハ陀羅尼集經ハ補
 陀落迦山此云海島と云々山谷詩集ハ海岸孤絶處補
 陀落伽山譯者以謂小白花山と云々華嚴疏ハ山多
 此樹香氣遠聞ハ見必欣是隨順義と云々○此山磁石
 多ハと云々惠等の舟もこまりたりと云々異物志ハ漲
 海崎頭水浅而多磁石徼外大舟以鉄葉固之者至此皆
 不得過と云々○下河辺行秀那須野侍將の時大
 鹿と射換ハ紀州熊野ハ入ハ薙髮ハ後年補陀落ハ

赴くハと云々東鑑ハと云々湯殿記ハ享祿三年四月十
 五日肥前国ナニと云々上ノ号ヤす
 又奉るハと云々今ハ紀の熊野の寺ハ此奉るハハ傳
 々同書ハ天文元八月熊野の那智造管ハと云々ナ
 ニと云々新撰ハと云々あハハ上ノ号の奉ヤハと云々
 ナニハ實國法師也○日光山ハ補陀落と云々ハ二荒の古
 名ハと云々平城天皇の比ハと云々洛北江文明神社ハ
 靜原との名ハ補陀落寺ありき延昌の建立たり
 二上、峯ハ日向あり神代紀ハと云々二上山ハ大和
 葛下郡也今喜りてと云々式ハ葛木ニ上神社あり山頂ハ
 ちヤリ其神社の東ハ二上山墓あり大津皇子あり西
 卷記云ニ上嶽ハ坐豐布都靈神社亦名武雷命大將軍
 坐大國魂命
 神名式下野、水内郡ニ荒山神社ハと云々

とて呼て美字公撰とてあり日光山とてあり一宮記と大
己貴命とて又事代主神とて又摩訶羅神あり即素
盞鳴尊也此社ハ頼朝公建とて頼朝堂あり是ハ摩多
羅神権現とて○日光山歴覽記とて日光神輿三社前ハ
大権現中ハ日光権現後ハ山王権現とて由大権現ハ東照宮
公指てと

ふとつたり 二皮目の義文選の曾波公とて○二川ハ参遠兩

國の界とあり義仲の將と二川頼政あり

ふたむくは 藏玉集とてみれとて

ふとどとて 二ツ巻とて義あり後撰集と

いきま由のゆとてありセリけり素きだれてあり公名

日本紀と秋慈之轉雙納とてと

ふとつたり 戴心也左傳とて攜戴とて不忠とて實朝公
山ハ海ハあせり世たりとも君とて心とてありやハ

ふたつぎぬ ニツ衣とて禁秘抄とて

ふたづい 日本紀と書信とて文の使とて○後世

ふたがきとて

ふとつたり 日本紀と兩枝船とて古事記と二股楳

作と二股小舟とて○二股川ハ武藏とあり畠山重忠公殺

せり所と

ふとつたり 奥州武隈とあり松の名あり後拾遺集と

武隈の松ハ二本松とて人といとてとてみきとて人

ふとつたり 二巻とて義とてと

それともとてとてとてとてとてとてとてとて

ふとつたり 伊勢但馬播磨とてあり紀伊小和奇

浦のむとあり二見浦も立石の景ありとて伊勢と似と

より伊勢へ伊勢の立石とてハ村とて約道の境あり西
行法師

さうろ 藤す立石傍のまゝ 藤はあゝきまをわとめりたる哉
世記に 速雨二見 國とととと 大和宇智郡 二見神社有
今雨師ととと

ふささやの之 万葉集 二韮之家 とも家の内 又は藤
造りこえたるかたりとと

ふささやの之 楓の若葉 藤よりととと 藤は木のまゝ
二葉ととと

ふささやの之 葉の紅葉 藤よりととと 折人もれ
ふささやの之 神代紀 二神 藤よりとと 伊弉諾 伊弉册 考

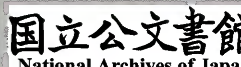
ふささやの之 柱の喩 藤よりととと 古事記 藤
日本紀 藤字 葛字 藤よりととと 西土も同 今

○文集 紫藤花下 漸黄昏 藤よりととと 後撰集
名 藤よりととと 紫藤 藤よりととと 紫の葉の花 藤よりととと

考 藤よりととと 藤のつねたをれ 時もさすをる
白花のその 藤よりととと 又黄ふらあり 又土用ふらあり
又又 藤よりととと 紫白二種あり ○小つらととと 錢藤之伯
者よて 時をさす 是あり 藤よりととと 蟠龍藤ととと
岩ふらあり 地槐あり 河原ふらハ雲実あり 薩摩ふらと
荒花あり 紫源氏ととと 口ふらあり 志の部 藤よりととと
つら豆ふら又ととと 藤よりととと 招豆藤ととと 又ととと
ら 藤あり 雪藤あり 藤よりととと ○藤の両樹 相隔て
互に 連結 藤よりととと 靈木と 軍家の用とす 藤よりととと 愈安期
鐘藤 藤よりととと 鐘藤 纏樹 枝樹 枯藤 作樹ととと ○衣
藤よりととと 表紫 藤よりととと 藤よりととと ○藤ハ 万葉集 藤よりととと
と 夏と 二部 藤よりととと 拾遺集 藤よりととと 入るの 餘ハ 多く 藤よりととと
たり ○藤原ハ 大和 此邑 名ととと 藤井 藤よりととと 藤よりととと 藤よりととと
藤よりととと 藤よりととと ○姓 藤 藤よりととと 藤よりととと 藤よりととと 藤よりととと

傍せ呼らるる後、その子孫の称号と多なる之を宮頭藤原
 叙用公高藤と号し、木二頭高系為憲公藤と号す
 是より主馬首藤原資清と首藤と稱し、加賀守高系景
 道公加藤と呼らるる也、亦曰く、佐藤安藤武藤とくも佐渡安
 藝武藏公とて多かるる也、又内藤あり、伊藤あり、甲藤あり、
 藤野ハ参河公あり、今高池と云ふ、ハ朔ノ藤の花と云ふ
 寒具公川端道喜より禁中ノ奉獻云々、いづく思ふべき
 つけ、折入とぞ、○藤島ハ越前、国あり、新田義貞の討
 死セリ、所あり、○藤門ハ備前あり、佐々木盛綱、先登セリ、襲
 あり、○藤森の祠ハ式外也、山城紀伊郡あり、神幸の地、縮
 荷町藤尾社
 文選注、府中大將軍幕府也、古文後集より、府
 中、大臣宰相所居と云、駿河國、府中と稱する所を
 和名抄、蒲公英公訓せり、藤菜の長あり、し

花の時、はより、たんり、
 右文の義、小書、より、み、ろ、ふ、
 雀、鶴、在、もの、こと、
 藤、逆、藤、波、あり、万葉集、より、され、藤、靡、の、義
 一、ふ、ひ、り、ぐ、い、よ、ふ、ふ、の、よ、を、と、た、う、て、岡、の上、あり、は、と、ふ、ら
 ち、と、と、より、と、より、○藤浪の里ハ伊勢度會郡あり、あり
 名所拾遺、沢地村の浅間の森の西方宮川との名の所の
 名、く、ゆ、り、新名所、分合の、ゆ、も、藤浪の里、あり、あり、あり、
 き屋形、公園、あり、荻浪氏居住の、あり、あり、あり、藤波の城ハ
 紀伊あり、南方紀傳、藤代城、あり、あり、名草郡あり、
 藤壺あり、飛香、舎、あり、○つ、やく、藤壺ハ
 藤道長の女、彰子入内の時の、装奩、より、称、せり、
 和名抄、駁、あり、あり、駁、も、同、班、の、義、あり、霜
 和名抄、贈、あり、あり、あり、あり、神代紀、天



斑駒もろえり一説く斑駒ハ鹿也と云ハ誤り也
もろり西土も似たりとあり

ふらやう 符帳の義市中教目レ隠語あり西土も似たり
事あり

ふらう 儀式帳一志藤方片樋宮と云ハ一志郡阿

坂の近きあり藤方谷谷ノ末一次に其在阿佐鹿悪
神平^{ラシ}使と云えり阿坂の神社ま^ハ戸ヤリ世記一四年

間鎮座一たまへり皇太神と云阿坂の神社ハ猿田
彦太神あり古事記一^ハ申○安濃郡と一志郡の堺津

より松坂一行道の藤万ハ寂念法師
伊勢の海^ハ流凡々^ハ荻や河のま^ハく又雪降^ハり

と云^ハ一是あり伊勢名所拾遺一と片樋宮^ハこの事^ハ花
と云ハ謬あり一是ハ雄畧紀一贄^ハ土師部^ハは^ハ一^ハ荻方^ハ

ふぢらん 小州之藤あどつんと云

ふぢんかー 藤放の義荒木の弓^ハれ^ハの^ハま^ハく^ハ押^ハと^ハ切^ハさ^ハら^ハぬ

ふあり古ハ弓^ハは^ハゆる^ハ射^ハあ^ハり^ハ巻^ハた^ハら^ハ放^ハと^ハり^ハ葛^ハ放^ハと^ハも

ふぢのとりぬ 春日乃社^ハの^ハ荻^ハの^ハ多^ハ居^ハと^ハり^ハ所^ハり^ハ慶^ハ賀^ハ門^ハの

西あり新千載集^ハ後^ハ醍^ハ醐^ハ天^ハ皇^ハ

ま^ハり^ハハ^ハ司^ハも^ハら^ハせ^ハる^ハ荻^ハの^ハ鳥^ハ居^ハれ^ハ花^ハの^ハ下^ハり^ハ

ふぢのう^ハと^ハ 藤の末葉あり又藤原氏末裔^ハなり

ふぢる^ハと^ハ 角^ハ萬^ハと^ハり^ハふ^ハぢ^ハハ^ハ色^ハハ^ハり^ハ

△ふぢ 俗^ハハ^ハり^ハつ^ハぢ^ハふ^ハぢ^ハと^ハり^ハ語^ハあり^ハ

ふつ^ハく 日本紀^ハ悉^ハく^ハり^ハ都^ハと^ハり^ハ

ふつ^ハく 普通^ハの^ハ音^ハ也^ハ義^ハ字^ハの^ハぬ^ハ○不^ハ通^ハの^ハ義^ハも^ハり^ハ

ふづく^ハぬ 和名抄^ハ書^ハ案^ハに^ハづ^ハく^ハぬ^ハと^ハり^ハ方^ハ史^ハ記

あもえ^ハり^ハ書^ハ棚^ハあり^ハ制^ハ矣^ハま^ハり

ふつく^ハき 多識編^ハ薤^ハ菜^ハに^ハり^ハ心^ハ得^ハと^ハり^ハ高^ハ蓼^ハと^ハり

仙人草ともよみ本草石草の仙人草と云ふ尾州
くつぐら隅田川辺に馬の齒くけ草とよみ齒をさせん後
るもの之花譜によみ鶴毛菊也ともよみ花白くあはま
て咲く、づあり

ふづむい 阿月潭子也とよみ胡榛子ともよみ蜜名あり

ふつてい 拂底とよけり

ふづくむい 憤公とよけり神代巻に悲又悲恨公とよみ

ふづくむい 俗語あり人言ふづくろふとよみハたろりとも

ふづくろ 意とよみ

ふづくろ 物強くとちりとのさハうき張るよみ俗語あり

ふつさけ 佛業花之紅白薄色飛入をよみの色草葉重葉

のふあり庐山紀事無双花ともよみとよみ琉球より夏草字

曇り博業神木あり生崑崙山東日野出處と云と同一
本草に扶桑と表出せり中山傳信多し花有佛業山
丹とよみ又六月佛業燒空三月開至冬此月尤盛とよ
り五雜俎注し山丹扶桑同出日本とよみハ此字され扶
業ハ琉球の事なり一きハ日本の事とすとの其誤知り
一琉球人の文に其ふのよみ扶業と書出せりとのあり
るハ是あり○武備志の圖に琉球の外に扶業を表出せり
其次り注輦國とよみ扶業あり奉元史とよみとよみ琉
球近く毛人表一蝦夷は遠く外國の内に出せりごとく
傳聞の謬誤ありなり一とよみ海東諸國記に扶業は津
輕大里の東に出せりとも同一梁武帝の時文身は扶業
國通すともハ文身國ハ蝦夷の地扶桑國ハ琉球の地あり
ふつとよみ 埃囊抄に髪飛はとよみ義訓あり凡のふく

う如く鳥とよ意あるへー○ふつと川ハ参河あり
ふつとくせき 佛足石也大和添下郡の薬師寺の庭前
あり傍に石牌ありて和奇十七首の彫り是皇后光明子
の仙も取あり

がろふふとく 佛法僧鳥也紀州高野山にあり大に鶴
りハ小也脊を名き色羽を黒色ハ雜へ嘴赤く太く足
と赤一ハ爪前ニツ後ニツありて夜陰に雄佛法と鳴雌
僧と唱あり高野山龍光院に獵師の納り鳥の片羽
あり鉄炮をくちり片羽の毛をくちり守り羽色
の美ある比類あり世人多きものなり是も佛法僧鳥なる
へーと云傳へり弘法大師觀心寺にて詩ありて曰寒林獨坐
草堂曉三賢之声聞一鳥一鳥有邑人有心性心雲水
俱了々惺窩先生性灵集中第一とせり古歌に
松尾の峯をうらむらけのしあきてすけハ佛法僧あり

延朗、故事に据りしや山城の醍醐山にも此鳥あり幸鐘の
銘にあり徐氏筆精に九花山産念佛鳥形大如鳩色黄
褐翠碧間而成文音韻清備如誦仏色とありと歎せり
△ふでたぐ 筆はまぐと初らびよ全浙兵制に新歳筆
筆と題して

あつむ此年の始の筆だてく方のたぐとせりすけり
○俗に筆床はもとより筆架ハ名物方言にも類聚雜要
に筆臺もええとあり

ふでがき よく筆に似たり鹿心柿也と有り和名抄に山
柿とよも是あり一〇信濃柿も数あり軟枣也と有り共
柿品の極トあり者ハ猿柿或ハ蒲萄柿と称するも同一〇石
見國美濃郡柿本人麿の出現せり柿とよの柿樹と
筆柿と名くこハ別種にて実も細長く末の尖黒く葉と点
しと有り如くと有り

ふでのあし 筆蹟之式子内親王

ふでのあし 過みしとびるうたはあしぬ昔しそてをまし
ふでのうし 筆海あり硯はふしとろ新六帖し

ふでびさむ 和斎の浦ハ多くれ人の筆の海沖し色も藻塩り
ふでびさむ 東鑑し漆字と申今春なりとろ

ふであし 筆洗の訓あり筆池もふ
ふぶと 竹風木風のたれありとろ新撰字鏡し蚊を

ふぶと 口やとろ義あり一蚘也とろ正字通し蚘似蚊而
小望之如霧一名蠖蝶とろえとろ○手足の指れ本末し

ふぶと 生るる瘡あり本ありはやくとろまをるびとろぐとろ
天蛇毒也とろ○寒具しとろ伏免とろり又倍銚の字

ふぶと 以用ふ音之和名抄しとろ油煎餅名也とろ新撰字鏡
し餹はとろり

ふとわ 大荒也れりぬとろ新撰字鏡しとろ○ほとわハ

龍鬚也○更級日記し下つふのふとむさの境とふ
とわ川とふとろとろ

ふとん 蒲團の音ありとろ蒲巻ハ叢林語山座の敷
ふとん 玉花集し溪の蒲とりて密編とろ今卧褥の事と

ふとん 十たハ此とろとろ

ふとん 日本後紀の宣命し太前とろり神前ふとん
祝詞式しと天照大御神とろ

ふとまむ 日本紀し絶と訓とろ令義解し鹿為絶とろ
ふとまむ 今ふとろとろ太織の義と

ふとたす 神代紀し太手織とろ即木綿手織
とろ

ふとろろ 源氏世継しとろ懐紙とろり今とろ鼻紙也
とろ

ふとろろ 万葉集しとろ太心とろり

△ふふ 茅栗也と云う掬ふと云うハ心ほぐと云う ○此本と

ふふぎ 万葉集と云う舟木の義之 ○舟木ハ後拾遺

ふふし 和名抄と勝ふと云う舟荷の義あり

ふふで 船田と云う姓と云う太平記と云う 所謂開洋也

ふふぢ 日本紀と水手と云う舟子の義之舟子ハ詩經と

ふふぢと 和名抄と浴と云う舟と入ると水あり今と云う

ふふぢと 船と云う舟端の義漢又辞の柁と古来と云う

ふふぢと 日本紀と舟柁と云うの(と)と云う(ハ)邊と云う

ふふぢと ○太神宮式玉纏横刀須我流横刀の下共と云う金

ふふぢと 船形ありて長六寸廣二寸五分と云う遠州教知郡飛神の

ふふぢと 神体とするもの正と此物ありと云う

ふふぢと 土左日記と云う舟君と云う舟とのりあり中のふぢ

ふふぢと 船上ハ伯耆也後醍醐帝の据と云う所あり新

ふふぢと 葉集の序製と云う舟の上と云う

ふふぢと 舟坂ハ播摩也見島高德と後醍醐帝の西狩

ふふぢと 舟候と云う夏也

ふふぢと 舟冬と云う倭名抄と云う

ふふぢと 舟と云う橋と云う越中富山と云う加賀と云う行

道と云う十六艘と云う掛と云う橋あり本邦才一と云う

ふふぢと 本草原始と云う海蛆と云う

ふふぢと 權欵也欵乃も同一後柏原院御製と云う

うき身と云うはむ舟のよと云う舟子の心ありと云う

作語集 卷之二十三

ふかりう 船藁の義ありて馬病に治す救荒本草

の白微也とて鉄砲草ともて花は白黄紫の品類あり

鹿苑草ともて花肆の名あり又徐長卿に訓ヤリ花肆は

弁慶草ともて四葉ふかりて蔓ふかりて細葉の

きのハ石下長卿也

ふかぢち 日本紀に發船とて武備志にもある也

ふかす 童蒙頌韻に艘代とあり

ふかひり 正曆五年六月廿七日被安置疫神於船岡とて

お洛の西北にあり○舟岡山を江州蒲生郡にあり佐々木

高氏同姓信詮と我ひて所あり

ふかごり 船越氏の盛衰記にる也○志摩ふか船越村

あり

ふかっち 着葉集にふかりて今の俗船とて是あり

ふかづそ 舟綱の義華に似る細草あり水辺に生す

ふかづり 古事記に船腹とてふかづりといふと船ありといふ

ふかむり 舟梁の義十二色あり万葉集の見安注にふか

づりハ舟の内とてさばはく渡りたる本也

ふかよづみ 舟に呼ありむひ及び也

ふかざり 万葉集にふかふかよづみといふ一其幸ハ舒

明紀に歩り字彙に艦ハ舟飾といふ

ふかづみ 舟褰とて灌佛の布施色に又鸞眼に

紙に包む白木の枝にけあむ仏前に供ふるとつり吉

記洛兼四年玉葉文治二年三長記建永元年といふ

ふかざり 招也といふ

ふかやう 和名抄に蓬痺にふかり初學記に舟上屋

也といふ是ハとてふたふかといふ一和名に舟上屋謂之廬と

もろええあり

ふかぎりり 万葉集に名舟競ともあり

ふかきよみ 舟がゆきんとて僅す之

あかあきびと 漕賈ぶらり

△ふじん 金剛經に無人相と云えり

△ふれり 俗語あり富饒の言

ふれり 船貝の義蚤小舩ともなり夫木集に

くく人も満ちあふ舟がへ吹く風やけかてぬらん

ふれり 莊子に刺舩と云えり

ふれり 伊勢物語に日本紀に合舩とあり

ふれり 多識篇に敗舩茹が訓せり字彙に竹茹

以塞舟也刮取竹皮為茹と云えり和名抄に大細に

てふれりのり訓せり

△かのき 越後よりゆく深山に生えり

ふのやき 鼓の饒の義小麦粉に造り

△ふん 伊勢物語に由文策の義之西土の書に拜匣

あつらんあつらん信物の箱あり

ふん 平措あつらん古言あり風波の音

のあつらん東鑑にえんハ誤ありふんつくあつらん倍語

と同一きりや

△ふびや 源氏に中腹痛とあり

△ふつ 織物に名く字知へり

△ふらり 布敷鳥に今つらりとあり

△ふらり 日本紀のふらり由合隠の義之

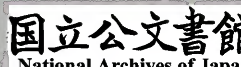
ふらりてくら 和名抄に飛廉草にあり

△ふまい 分采の字神鳳抄にあり

△ふたぎ 機具に踏木の義列子にあり牽挺ありと

ふみゑ 踏繪の義あり肥州長壽港へ毎歳正月四日以後きりきり所崇の像に度く市井しりて法人し踏し此像に綱して籍さる抽六七寸あり常小八獄舎し是れ此時ハ官吏の命と奉して守ん異邦の船入津しれと船中の人し彼繪にそく踏ませ其土の街談に於て後船より上り傳り齋米の書籍ハ多天主の法あり即焼くと庚寅の年入津の清人終りハ戊子年西僧一念ハ邪禰のたより始術にりて黨り山徒ハ五六百人諸州名山し扱て叛逆し其中ハ陝西の梅村より出り梅山と云道士康熙四十七年我寶永戊子六月梅村し梅花開く又順治通宝錢十八文康熙通宝錢四十六文次し梅山通宝の字あり錢十八文とあり是天下既し歸する兆也と云りしと兵にあり此奉朝しするて賊六七百人誅し伏し梅山一念も行方なく翌巳丑の年一念を搜出し刑し同年我薩州し漂寄

異國人し和語し通文しうらあさ南蛮伴天連し近年我朝し鑄る元の字あり小判三兩に懐中せしとそ金議ありて長崎の獄舎し繫せしとふん
 和名抄し笈にありり状如冠箱而卑し注せり又唐韻し負書箱也とそりり○今書簡に往後よりり用るふむこハ此名に傳まると
 和名抄し出櫃にありり文集しとそ
 侍中群要し文夾しとそ雅亮抄し最上のふむ
 類聚雜要しとそ
 踏段の義階にそ
 采人劉蛻し文塚の銘野客叢書しとそ
 文の龜ありふむとそりりしとそりり神倉の洛書に負しとそ
 蹂躪にありり漢書しとそ新撰字鏡し踏跌又



蹠跣又踰もより

ふみたけび 古事記に踏建と云日本書紀に蹠誥と

色踏叱もちり

ふみこちり 神賀詞に上津石根に踏堅り下都石根に

踏凝りと云

ふみあきき 踏敷の意野をよりより住吉物語に紅

のひしんむつりふみたるもるえり

ふみあきせ 踏合の義織の家に行穢の人より此後を

里

ふみのたより 書信をよみあり

ふみふみびと 日本紀に師又博士はより

ふみのたより 倭名抄に圖書寮はより源氏にふみ乃

つらちももゆ花鳥に女官に書司と云ふもるえり

△ふん 分字の音也分相應分がまぬ其分此分親子分

兄弟分ありふハ名分職分のおありなり ○物分はつ分

しつりもつり分別の義之 ○文章は文とありもつり又

文案の付は施の日文と義解と云ふなり

ふんこ 文庫と云り書籍のつりあり ○俗に文画はふんこ

より

ふんや 日本紀に字字はより字館は文屋の義あり大

字ハ教業坊にあり三條東ありと和名抄に云 ○姓に文屋

と云ふも義同なり

ふんど 源氏にふんどより枕草紙に云ふに云ふに

ふんた 源氏に云ふに云ふに云ふに云ふに云ふに

可漏子に謂封皮と云ふなり

ふんだい 源氏に云ふに云ふに云ふに云ふに云ふに

木被作文臺是院の物物也と云ふなり永縁僧正ありの

橋のきねを伯母より得り秘蔵せりき一幸字後松造り
 せんより○葦の細道と名なるハ伊勢物語の山に故る
 取く衆めて造り後水尾帝の時く来まりと之り○
 靈元法皇宮の時く播磨曾根の天神の古松とめて造り
 たる文臺は献せり近世の書くもえり魯國孔林の
 楮樹はめて杯盤は造ると同日の談多し一○大明會典に
 日本貢物濃金文臺と見えり○埋木の文臺ハ徳大寺家
 の秘蔵と之り沢栗の本とて造り定家マ名取の分れ意と對
 してせりと之り○世に名柄文臺と云ふ川村氏名柄川とて
 橋柱は掘出せりはとて名柄の橋と書きかの古杉は橋柱
 のとて填たるより俳人其角々集くと見えり古は摸せりも
 まり〜〜〜○嘉保三年三月内裡御會初度御製文
 臺用御硯管蓋野行幸時用揚笠と袋草紙と見えり
 西行の伊勢二見浦に廬は造り時代紋の會は扇或

ハ花筐もて文臺に代りて西行物語と見えり

ぶんつゝ 文夾は音して呼べしと之り

ぶんどり 戦場は分捕高名と云ふ首は大小は流く取まり

ぶんりあり

ぶんせん 室町の末天正の比まで武家此采地に永樂錢幾

貫と云ふあり是は分錢の法と云ふ毛利家の感状と云ふ
 分錢八貫と云ふ熱田の祭主田島氏の家領中一
 三百五十三貫八百五十文の采地あり彼家の右き柱は右
 の分錢は石並にありて五百三十石七斗七升五合と記せり
 と之り○今俗に云ふハ錢背は文の字あり

ふんてり 文鳥と云ふ状と云ふ似く麗く云ふ名と云ふ近來

外國より渡ると云ふ

ふんろ 粉骨の字通鑑陳後主紀と見えり

ぶんごい 通鑑集覽に自度我之分割と見えり或ハ

分際とけり

ぶんどうり 分銅とけり法馬ハツマノ享保中ノ籠前博多

ノ堀出セリ法馬ハエノ世此物あり

ぶんどうり 緑豆也文豆の義東国ノころろく遠江ノころこ

備前ノころり伊勢ノころりとも

ぶんどうり 踏張の義踏字の意

ぶんどうり 踏反の義之ぶんどうりとも

ぶんどうり 俗語あり踏断の義決字の意之

ぶんどうり 踏蕨の義股引の義之ころり○兵具ノてハ鏢ノ

てころり

ぶんどうり 俗ノ積鼻禪ハツマノヤブノとも清人の積

鼻禪ハ短袴の如ク禪の積鼻の穴ノてハツマノ名ノふ

もナリ此積セヨあるハ○長寄又日光の辺ノハツマノ

奥州ノころりとも常陸ノころりとも

ぶんまハ 規ハころりぶんまハツマノの義ありハ古制ハ

尺の真中ノ錐ハツマノ字ヲころりころり梁陸陸集ノ計如

我水思若轉規ノころり

ぶんまハ 分上の字ノ外過ハをハ分と回ノ我ハ

とのとも

ぶんやハ 日本紀ノ學生ハ訓セリ

ぶんやハ 日本紀ノ學職トナリ又大學寮ハツマ

ぶんやハ 白氏文集ノ跋扈ハツマノ踏跨の義ノ鄙

俗ノぶんやハツマノ

ぶんやハ 下總國ノ早賤の後之飯ハツマノ水

ハツマノ入ノ一ハツマノ鍋トハツマノ傾ハツマノ足ハ

ツマノ水ハツマノ捨ハツマノ飯ハツマノ踏絞飯の

義あり

ぶんやハ 又不冗ノハツマノ鸚鵡螺ノころり鸚鵡杯ハ此貝

又九穴とも中へ薄膜へくもくもく穿針の一孔あり是より線を通し翫物と云はれ九曲の珠の故事と傳會するもの之又小説ノ華山法皇神龍ノ九穴貝以獲く那智の瀧へ沈りたまふ此為海食ふものハ永年老すと云ふ

△うやと 令殖の義やす及申あ

△うやく 夫役とくけり字彙ノ度人徃役曰夫と云ふ

△ふゆな 冬菜あり江戸小松川 本所牛島及葛西菜は

京大坂もありて風味よし

△ふ申がれ 冬枯あり草木の体ノ冬

△ふ申ん 天竺物のとくりの名ノ冬

△ふ申ぬ 冬の本葉あり落葉ノ冬

△ぶらぐ 振の義ゆつくふらぐふらぐ

落離の音ありともさう又ふらぐとてとも同義あり一
ふらぐんす 拂郎察ノ説す歐羅巴の内ノて和蘭国ノ近

軍法ノ長ノたるふらぐとて○新ふらぐんをハ北亞墨利加
洲の内之蜜を多く採るて少ノ雄はマ十五六寸ノふらぐ

△ぶら 眞師はふらぶら此義あり一うらやきとて

別ノ製ありとの之薩摩ノてさうとてハ蝦夷ノてさう
ろすけとてハ鯽魚ノてハ二合の意ノハ唐韻ノハ鯽ノ老魚

也と云ふとてハ○小あらふらとてさうとてハ北陸道ノてさう
たるとハ北陸道及奥州ノてさうとてハ筑紫ノてさう

とてハ大あらふらとてさうとてハ北陸道ノてさうとてハ
その至大あら物ノ一種の大鯽ハ鼻赤ノてさう

△ぶらぐ 圓物の制ノ同ノてさうとてハ田家

とてさうとてあり碌碌ノてハ糧益ノ三才圖會ノてさう

△ぶらぐ 手ノ振く物ハ賣はふらぐ高ハともさう

六帖

百まやうに此のうりうり我ちうりうり
神代紀に濯とよみ奮事紀に振濯とせり
和名抄に北鼓にうり洛陽田樂記に振

鼓とてんり世本に以手揺之曰鼓とて由
圖抄に追
籩の條に行事藏人献攤木振鼓等於臺盤所とて由

液雨をうりうりみハ休め字之
伊勢物語にうりうりうりうり
雨くも音も色もる

古枝の義にうりうり枝あり○藏玉集に古枝
草ハ枝之西行あり
宮城の義も色うり古枝は今年秋もくハ咲たり
觸れたり縁にうりうり身もくうりうり

是あり

俗語ありうりうりの精也
和名抄に

俗語あり瘀血にうりうりき血あり○和名抄に
河内國古市郡にあり
俗に絹布の故きうりうりてハたへの反也とせり

奮事紀に布瑠倍とてるもうり反まあり振
の義あり
振掉ありうりうりハ經の義之

故事にうり日本紀に奮例にあり○古琴
の義あり
淳泥と詠す蛮國の名とて色たうり人物同一

日本紀和名抄に耆宿にあり古翁之
古風にありうり
奮蹟にあり荒うり臨住捨にあり

古風にありうり
奮蹟にあり荒うり臨住捨にあり

